

郷土博物館・文学館だより



展示室風景



紙製の「火事兜」と「仏像」

企画展

「紙と日本人」開催中

現在当館では、企画展「紙と日本人」を開催しております。展示では、かつて渋谷で行われていた「紙すき」についての解説や、紙で作られた服である「紙子（かみこ）」・「紙衣（かみい）」、革そっくり紙で作られた「擬革紙（ぎかくし）」、巧みな技術で作られた装飾された紙など、日本人の知恵と技術を紹介しています。また、現存する最古の印刷物といわれる天平時代の「陀羅尼（だらに）」、和紙で作られた実用の兜、平安時代の紙を江戸時代に再利用して作られた経、太平洋戦争中に布の代用品として作られた紙の下着、現在のティッシュペーパーにあたる江戸時代の「浅草紙」、今回の展示で250年ぶりに一般公開された神楽の鳥兜、ヴェルサイユ宮殿の壁紙などにも採用された日本製の和紙である「金唐紙」等、初公開の資料約400点が展示されています。



展示室風景

猿楽遺跡と環濠

渋谷駅から東急東横線に乗車して一つ目の駅は代官山駅ですが、この駅周辺はファッション誌などでよく紹介され、人気スポットが数多くあるところです。この人気の場所ですが、いにしえから人が住み、多くの遺跡が見つかる場所でもあるのはご存知でしょうか。

いわゆる「代官山」と呼ばれているところは、地形的には西渋谷台地に位置し、渋谷川と目黒川にはさまれたところで、旧石器から縄文・弥生・古墳時代と人が住んでいました。鉢山町・猿楽町 17 番遺跡、鶯谷遺跡、猿楽遺跡、猿楽塚などが、この地域の代表的な遺跡になります。なかでも猿楽遺跡は弥生時代後期の遺跡です。

猿楽遺跡は、昭和 31 年（1956）に渋谷区立猿楽小学校に隣接する場所で、建設工事の際に土器が収集されたのが最初になります。その後、猿楽小学校付近では建設工事等が行われる場所で遺跡が確認されると、発掘調査が実施されてきました。平成 25 年（2013）に調査が行われた猿楽遺跡第 5 地点の調査では、特に注目すべき溝が見つかりました。その溝とは、いわゆる「環濠（かんごう）」と呼ばれるものです。

大陸から稲作文化が伝えられ弥生時代が始まりますが、稲の栽培はそこに住む人々に豊かな実りと生活の安定をもたらしました。その一方で、争いを生む原因にもなったのです。収穫物や耕作地などめぐって、「ムラ」同志が争うようになりました。そこで争いからムラを守るため、周囲に深い濠を巡らした「環濠集落」が造られるようになったのです。

これまで国内で見ついている環濠の特徴は、溝の深さは人の背丈より深く、しかも飛び

越えられない幅をしています。また何重にも環濠を掘り巡らしたのも見つかっています。さらに外敵を防ぐため、濠の外側や内側に土塁（どるい）や柵列（さくれつ）を築くもの、濠のなかに逆茂木（さかもぎ）などを設けるものなど、多くの発掘によって明らかになりました。

猿楽遺跡第 5 地点で見つかった環濠は、断面形がV字形をしていて、最大幅は 3.2mを測ります。環濠の確認面からの深さは 1.8mで、まさに弥生人よりも背の高い現代の平均男性の背丈以上です。溝はほぼ南北にのび、写真中央の溝の右側（西側）に竪穴住居が十軒以上発見されたため、環濠集落といってよいでしょう。

区内の環濠集落は、猿楽遺跡のものが 2 例目になります。1 例目は同じ西渋谷台地上の鉢山町・猿楽町 17 番遺跡で、猿楽遺跡の南西約 300 mに位置します。また猿楽遺跡から北に約 200 mには、弥生後期の集落である鶯谷遺跡がありますが、こちらはまだ環濠は未発見です。

弥生時代の西渋谷台地はこのように集落遺跡が見つっていますが、まだ関連性がわかっていません。新しい発見が待たれるところです。



猿楽遺跡第 5 地点で発見された環濠

画家兼歌人・平福百穂

平福百穂(本名・貞蔵)は明治10年(1877)、秋田県角館(現・仙北市)に画家・平福穂庵の四男として生まれました。23年(1890)から父に習って絵を描き始めた百穂は、翌年上京し、日本画家・川端玉章の弟子になります。32年(1899)に東京美術学校を卒業後、一旦帰郷しますが、翌年に兄弟子の結城素明らが結成した美術団体・无声会に参加、2年後に再び上京し、西洋絵画を学びました。

无声会が大正2年(1913)の第13回展覧会をもって自然消滅したのち、百穂は自身が徹すべき絵画手法は“写生”であると認識します。翌年、自宅の庭で鴨と七面鳥を飼って生態を観察し、それを基に制作した屏風画『鴨』『七面鳥』は従来の自然主義画風に装飾性が加わり、日本画の新境地を開いたと評価されました。

画家として名高い百穂ですが、歌人としての一面も有しています。明治35年(1902)頃、百穂は素明の紹介で根岸短歌会の歌人・伊藤左千夫を訪問し、やがて自身も短歌を詠むようになります。翌年に根岸短歌会の機関誌『馬酔木』が創刊されると、百穂も短歌を発表し、これが縁で島木赤彦と知り合いました。41年(1908)の『アララギ』創刊時には、百穂も主要メンバーとして参画しています。百穂はアララギ派歌人が上梓する歌集の装幀を担当したほか、『アララギ』の経営を助けるために絵画頒布会を実施(赤彦が主宰)するなど、『アララギ』の発展に大きく貢献しました。

百穂は明治42~45年(1909~12)まで渋谷区上渋谷(現・神南1丁目)で、大正3年(1914)まで穂田(現・神宮前5丁目)で生活していました。この時期、百穂宅で時々アララギ派の歌会が開催され、左千夫や赤彦、斎藤茂吉などが出席していたといえます。茂吉のちに、百穂宅が代々木練兵場(現・代々木公園)の並びに建っていたことや、健啖家であった百穂が、青山の「いろは」や渋谷の「二葉」などの料理屋に通っていたことなどを回想しています。

百穂の歌集『寒竹』(1927)には「鴨」と題された8首が収録されていますが、詠まれているのは百穂が屏風画の題材とするために、渋谷の自宅で飼育していた鴨です。百穂は後年、彫刻家の石川確治に「僕は歌をやったために損したと思ったが、結局、歌のために絵がここまで来ることができた」と語っていますが、百穂が作品を創出する上で、短歌と絵画という二つの芸術は不可分の関係であったと言えるのではないでしょうか。



平福百穂画『観潮楼歌会』
明治43年3月『スバル』1巻3号

収蔵資料紹介

「水車一件」

天保6年(1835)

タテ 24.0 cm

ヨコ 16.0 cm



今では想像もつきませんが、明治のころまでの渋谷は、水車が回るのどかな風景がいたるところに広がっていました。今回紹介するのは、渋谷で水車業が盛んだったことを示す資料の一つです。

江戸時代の渋谷の水車の用途の多くは精米・精麦のためのものでした。当初は村内で収穫された分の作業をしていたようですが、次第に江戸市中の精米業者である番米屋(つきこめや)の下請けも行うようになります。こうして水車業は重要な産業として成長していきます。しかしもともと江戸市中には、大道米舂(だいどうこめつき)という家々を回って精米を行う零細な業者が大勢いました。彼らの商いに対して、人力を使わない水車による精米はコストがかからず、昼夜にわたって作業ができるなど、圧倒的に有利でした。そのため江戸近

郊の水車業の発展によって、大道米舂の商売はしだいに圧迫されることとなります。そしてついに一つの騒動がもちあがりました。天保三年(一八三二)十月、大道番米仲間が、下渋谷村から運搬途中の精米を差し押さえてしまったのです。それを契機にはじまる訴訟の記録がこの「水車一件」です。

訴訟は二年半に及び、水車業者が大道番米仲間に年間三十両を差し出すことで決着しました。「水車一件」からは、こうした渋谷の水車営業の実態のほか、千駄ヶ谷から下渋谷に至るまでの渋谷川沿いの各水車の営業開始年など、大変貴重な情報を得ることができます。

この資料は下渋谷の旧家岩崎家に伝えられ、のちに縁戚で水車業を営んでいた加藤家に移されました。そして昭和五年(一九七六)に加藤家から渋谷区に寄贈されました。

【今後の展示予定】

◆企画展「第21回 渋谷現代短歌」
令和3年4月1日(木)～4月11日(日)

◆写真展「昭和30年代の渋谷」
令和3年4月17日(土)～6月13日(日)
東京オリンピックの開催によって大きく変わった昭和30年代の渋谷の街並みの写真を紹介します。

◆「新収蔵資料展」
令和3年6月23日(土)～8月15日(日)

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

◆ 金曜日は19:00まで、土曜日は9:00から

休館日 ◆ 月曜日(休日の場合はその直後の平日)・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1 内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.46
令和3年3月15日発行